九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

The Philippine Islands 1493-1898 所収日本関係史料（1567-1586）

岡本，真
東京大学史料編纂所

https://doi.org/10.15017/27526

出版情報：九州大学東洋史論集. 41, pp.1-21, 2013-03-29. 九州大学文学部東洋史研究会
バージョン：
権利関係：

The Philippine Islands 1493-1898 所収 日本関係史料（1567-1586）

岡本　真

はじめに

The Philippine Islands 1493-1898（以下、*The Philippine Islands*と略す）は、エマ・ヘレン・ブレアとジェームズ・アレクサンダー・ロバートソンによって編纂され、アメリカ合衆国オハイオ州クリーブランドにおいて、アーサー・H・クラーク・カンパニーから1903年より1909年のあいだに出版された史料集である(1)。その内容は、フィリピンに関連する主にスペイン語で記された多くの書籍や手書き史料を収集し、それを編者が英訳しおおよそ編年順に配列したもので、55巻におよぶ大部となっている。そして、編者の付した総序には、アメリカ人がフィリピンで直面している重大な問題に光明を投じるとともに、詳細で学術的な、フィリピンの歴史のための信頼できる史料を提供するという意図に基づいて出版する、と記されている。

出版当時の状況を見ると、次の通りである。米西戦争の結果1898年に結ばれたパリ講和条約によって、アメリカはスペインからフィリピンの領有権を獲得した。だがフィリピンは独立を求めたため、まもなく米比戦争が勃発した。その後1902年にはフィリピンの主要部分を抑えたアメリカが本土議会でフィリピン組織化法を制定し、大統領セオドア・ローズヴェルトはフィリピン平定の宣言をおこなった。そして以後、フィリピンの植民地化が進められていくに至った。そうしたさなかに編まれたのが、*The Philippine Islands*なのである。このことを考慮すると、前述の総序の意味するところも自ずと明らかであろう。

同書は、翻訳書であるがための誤訳の可能性も指摘されているが(2)、まとまった史料集であるだけでなく、他に翻刻・刊行されていない史料も含まれているため、先学の研究においてしばしば参照されてきた。だが、外国書だという制約もあり、同書の存在や内容が十分に周知されているとは言い難い。そこで本稿では、同書全55巻のうち1巻から6巻について、収録内容から日本関係の記述を抜粋し、翻訳を施した。ただし、詳細は凡例に記したが、網羅的な翻訳を意図したものではない。

本稿に訳出した13点の史料について、当時の状況を補足しつつ内容を説

明すると、以下の通りである(3)。フェルナン・デ・マガリャンイスの艦隊以後、スペインはたびたび遠征艦隊を派遣したが、航海の困難などにより、いずれも予期していたほどの成果を上げることができなかった。そうしたなか、国王フェリペ2世の命をうけたヌエバ・エスパーニャ副王ルイス・デ・ベラスコは、ミゲル・ロペス・デ・レガスピを先遣都督に任命し、太平洋経由で渡航させることとした。レガスピは艦隊を率いて1564年に出帆すると、翌年セブ島に到着し、居留地を建設して入植を成功させ、さらに1570年にルソンを征服し、のち初代フィリピン総督となった。**①フェリペ2世宛ミゲル・ロペス・デ・レガスピ書簡**（底本はスペイン国立インディアス総合文書館所蔵）は、その発給年月日からして、彼がセブ島に本拠を据えた後、ルソン島のマニラ攻略を開始する前のものであることがわかる。書中に登場するモーロ人は、スペイン人到達以前からフィリピンにいたイスラム教徒に対する、スペイン側の呼称である。訳出箇所は、植民地化以前のフィリピン諸島の交易の様子を具体的に示すものとして興味深い。福建などから中国人が同諸島を訪れて交易していたことは早くから指摘されているが、同様の活動をおこなっていた日本人の存在がこの文書には記されている。

②ルソンへの航海に関する報告（底本はスペイン国立インディアス総合文書館所蔵）は「マニラの征服と発見の報告」、「1570年5月8日」、「西方の諸島のひとつであるルソン島の発見に関する報告」との書き入れのある記録の一部で、同記録はこの書き入れと内容から、1570年5月から6月にかけてのスペイン人のマニラ遠征に関するものだということがわかる。パナイ島に在ったマルティン・デ・ゴイチを隊長とする遠征隊は1570年5月8日に同島を出発し、ミンドロ島を経てルソン島に至り、マニラの集落を焼き討ちにして占領した。訳出箇所はその際の記述で、スペイン人による攻撃前のマニラには、中国人および日本人も定住していたことが知られる。また、定住していた日本人のうちのひとりでテアティノ帽を身につけていた人物については、特に詳しく記されており、スペイン側との問答のなかでその人物は自身をパブロというキリスト教徒だと説明した。また、彼がモーロ人の砲撃手のなかにいたという証言は、マニラでの戦闘において、定住していた日本人のなかには在来のモーロ人の側に付いてスペイン側と戦闘した者もいたことを表していると考えられる。

③フェリペ2世宛ミゲル・ロペス・デ・レガスピ書簡（底本はスペイン国立インディアス総合文書館所蔵）は、末尾に記された日付から明らかなように②より少し後の時期のもので、パナイ島に在ったミゲル・ロペス・デ・レガスピが書き送った書簡である。そこに記された派兵のうちの二度目の方は、先に見たマルティン・デ・ゴイチらの遠征を指す。訳出箇所に

は、ルソン島に住んでいたモーロ人が、中国本土の人々や日本人を相手に貿易活動をおこなっていたことが記されている。前述の①にはフィリピン諸島に到来する中国人や日本人の様子が語られているが、③からは、逆にフィリピン諸島から中国や日本へ赴いたモーロ人もいたことが明らかとなる。

レガスピのフィリピン統治は1572年の彼の死去によって終わり、次代の総督にはギド・デ・ラベサレスが就任した。**④フィリピンと呼ばれる西方諸島に関する報告**は、*The Philippine Islands*では1573年のものと推定されており、これが正しければラベサレス統治期のものである。これはディエゴ・デ・アルティエダという人物がスペイン国王フェリペ2世へ送った報告書の一部で、内容はヌエバ・エスパーニャに関する記述からはじまり、同所からフィリピン諸島やモルッカ諸島に至るまでの島々およびその周辺に関する情報が記されている。訳出箇所からは、スペイン人はまだ日本へ到達していなかったものの、モーロ人は日本と継続的に貿易していたため、スペイン人はモーロ人を介して日本と関わりを持っていたことなどが明らかとなる。そして、ポルトガル人からの伝聞情報も交えながら、日本の貿易状況や日本刀の特徴、さらには風習にまで言及されている。訳出箇所末尾の頭髪に関する記述は、剃髪したり髷を結ったりしていたことを表したものと考えられる。

なお、*The Philippine Islands*に記載された書誌情報によると、底本には著者アルティエダの自署が加えられているマドリードの海外博物館図書館所蔵本が用いられたようだが、現在同館は存在しない。また、スペイン国立インディアス総合文書館には、地名表記をはじめ細部の異なる写本がある。

⑤フェリペ2世宛フアン・パチェコ・マルドナード書簡（底本はスペイン国立インディアス総合文書館所蔵）は、差出年月日は記されていないが、*The Philippine Islands*では1575年のものと推定されている。内容は1570年にミゲル・ロペス・デ・レガスピがルソン島に関して肥沃さや人口の多さ、そして貿易の機会に恵まれていることなどを伝えたことから説き起こして、地理情報を含むルソン島とその周辺の情勢にも言及し、さらに今後なすべきと考えられることを述べ、増援などを要請したものである。訳出箇所には、①と同様に日本船が貿易のためにフィリピン諸島へ毎年到来していることが記されており、日本人たちは銀と引き替えに金を受け取っていたこと、その交換比率が2～2.5対1だったことが判明する。また、マルドナードは、増援が送られてくれば日本や琉球などへ派兵して植民するという計画を描いていたことがわかる。

この⑤が発給されたと考えられる1575年には、フランシスコ・デ・サン

デが新たにフィリピン総督に任命された。**⑥フィリピン諸島に関する報告**（底本はスペイン国立インディアス総合文書館所蔵）は1576年6月7日にサンデが国王フェリペ2世に宛てて送った書簡である。内容は彼が総督に着任して以来の状況を書き送ったもので、非常に長文で127もの段落からなり、各段落の冒頭には番号が付されている。

訳出箇所のうち21の番号が振られている段落は、中国人海賊リマホン（林鳳）を頭目とする、フィリピンを襲った倭寇に関する情報が記されたものである。総督に任命されたサンデが1575年8月にマニラへ到着した頃、前年9月に襲来したリマホンらはすでにフィリピンを去った後だったが、マニラは大きな損害を受けていた。本書簡にはこの襲撃に関する情報が詳細に記されているが、訳出箇所には、その構成員に関する情報が含まれている。それによると、この倭寇集団が中国人および日本人によって構成されており、男女同数の集団だったということである。

また、冒頭に70および74とある段落は、サンデの目論んでいた中国遠征計画に関するものである。すでにスペインは1529年のサラゴサ条約によってマカオやモルッカ諸島におけるポルトガルの権益を承認していたにもかかわらず、サンデはスペイン国王フェリペ2世の許可さえあれば、ポルトガル人をそれらの地域から駆逐しようと考えていた。そして、訳出箇所からは、彼が中国に関する情報を現地人や中国人だけでなく日本人からも得ていたことや、日本は中国の仇敵だと認識していたことがわかる。

⑦フェリペ2世宛ゴンサロ・ロンキーリョ・デ・ペニャロサ書簡（底本はスペイン国立インディアス総合文書館所蔵）の差出人のゴンサロ・ロンキーリョ・デ・ペニャロサは、フランシスコ・デ・サンデのあとをうけて第4代フィリピン総督となった人物である。この書簡には、日本へ赴く船がマカオから出ていたことや、1580年およびその翌年に日本から来た海賊（倭寇）がフィリピンを襲ったこと、1582年にもその襲来が予期されていたこと、それに対して艦隊を派遣したこと、そして日本人の戦闘装備の様子などが記されている。

1557年にポルトガルがマカオの居留権を得て以来、同所と日本を結ぶ航路はポルトガルの定航船が往来したことで知られる(4)。また、倭寇のフィリピン襲来の背景には、中国における倭寇対策の強化にともなって、一部の者たちが交易の場をフィリピンへ移したことがあったとの指摘もある(5)。なお、この書簡が出された後の状況については、次の⑧および⑨に詳しい。

⑧ヌエバ・エスパーニャ副王宛フアン・バプティスタ・ロマン書簡（底本はスペイン国立インディアス総合文書館所蔵）は、⑦のわずか9日後にしたためられたもので、宛先のヌエバ・エスパーニャ副王はロレンソ・ス

アーレス・デ・メンドーザである。内容は、⑦に記された、ペニャロサの派遣した艦隊と日本人海賊との戦闘に関するもので、従軍した兵士によってもたらされた情報をもとに詳細に記されている。それによって、フアン・パブロ・デ・カリオンを隊長とする派遣艦隊は、ボルガドール岬付近で海賊と交戦して激戦のすえにこれを破り、カリオンはカガヤン川に拠点を構える倭寇と交戦していたこと、補給を担うサングレイの船が反乱を起こしたことが知られる。サングレイとはフィリピン諸島に来ていた中国人を指す当時の言葉で、「常来」あるいは「生理」（買売の意）という漢字の音に由来するとされる(6)。そして書簡の最後には、増援要求が切々と綴られている。

⑨フェリペ2世宛ゴンサロ・ロンキーリョ・デ・ペニャロサ書簡（底本はスペイン国立インディアス総合文書館所蔵）は、差出人の署名はないが、その書き入れから当時のフィリピン総督ゴンサロ・ロンキーリョ・デ・ペニャロサの書簡であることが知られる。訳出箇所には、⑧と同じく日本人海賊との交戦の様子が記される。⑧が従軍兵の証言に基づいた詳細な記述なのに対し、⑨は簡潔に記されているが、カリオンらの艦隊がはじめに交戦した敵船は日本船とサングレイ船の2隻だったことなど、ロマン書簡にはない情報も書かれている。訳出箇所の後半では増援人員派遣の必要性が述べられ、その実行が切実に要請されている。この点に関しては、⑧と同様である。

ゴンサロ・ロンキーリョが1583年に死去すると、その甥のディエゴ・ロンキーリョが後を継いで統治にあたったが、その頃スペイン本国では、マニラに王立司法行政院（アウディエンシア）を設置し、その議長がフィリピンの総督を兼ねるよう命令が出され、メキシコ司法行政院判事だったサンティアゴ・デ・ヴェラがそれに任命された。1584年5月のその就任から1年あまり経った時期に書き送られたのが、**⑩メキシコ大司教宛サンティアゴ・デ・ヴェラ書簡**（底本はスペイン国立インディアス総合文書館所蔵）である。宛先のメキシコ大司教はペドロ・モヤ・デ・コントレラスで、1571年にヌエバ・エスパーニャに渡り、1573年より1591年までメキシコ大司教を務め、1584年9月から1585年11月にかけては副王も兼ねた人物である。訳出箇所からは、当時の交易の様子や情勢の一端が垣間見える。それによると、ペドロ・モヤの意をうけたサンティアゴ・デ・ヴェラは、水銀を入手するためサングレイとのあいだで協定の締結を模索していたが、サングレイは自国で産出する銀を対価として支払う日本人との取引を優先しており、その影響で水銀の価格が高騰していたことがわかる。また、日本人がスペイン人たちに対し敵対姿勢を見せはじめていることを理由に、軍備の強化が必要であることも述べられている。

サンティアゴ・デ・ヴェラの統治がつづくなか、1586年4月20日に、マニラ在住のスペイン人聖職者や軍人、市民らによる総会が開かれた。そこで話し合われた結果は、抗議と要求の声明としてイエズス会の神父アロンソ・サンチェスによって本国政府へ届けられることとなったが、それが**⑪フィリピン諸島の市民による評議会への嘆願書**で、論点ごとに立てられた章が21にものぼる、非常に大部なものである(7)。*The Philippine Islands* で底本として用いられたのはスペイン国立インディアス総合文書館所蔵本だが、王立歴史学士院図書館に異本が所蔵されており、同書ではそれらの校合がなされている。内容は、聖職者派遣や課税方法の変更、司法行政院の廃止などを要請したものである。文書の末尾には、総督にして司法行政院議長でもあるサンティアゴ・デ・ヴェラを筆頭に、50名もの人々の署名がある。そのなかには、この嘆願書を本国へ携行したアロンソ・サンチェスや、フィリピン司教、イエズス会のマニラ学院長、フランシスコ修道会管区長といった聖職者のほか、審議官や検察官、さらには⑤や⑧の差出人であるフアン・パチェコ・マルドナードやフアン・バプティスタ・ロマンなども見いだされる。訳出箇所に目を向けると、第4章では、フィリピンでの農耕に用いるため、牛や馬を中国や日本から輸入することが提言されている。また、第7章では、日本人が毎年フィリピンを襲っていることを理由に、要塞を築いたり水軍を積極的に活動させたりしてその襲来に対抗する必要のあることが述べられている。

⑫フェリペ2世宛マニラ司法行政院書簡（底本はスペイン国立インディアス総合文書館所蔵）は、⑪と同様、アロンソ・サンチェスによって本国へもたらされたもので、末尾に署名を加えたサンティアゴ・デ・ヴェラ以下は、いずれも司法行政院の構成員である。内容は多額の支出による苦しい財政の改善を図るもので、原住民への課税率を増額し、それによって得られたものを兵士への支払いにあてることなどが提案されている。訳出箇所からは、国王の命により総督府などの建物を売却した様子がうかがえる。また、司法行政院は、それによって手にした資金を日本の海賊からのフィリピンの防衛などにあてるよう希望していたことがわかる。

⑫からちょうど1年後に書き送られた**⑬フェリペ2世宛サンティアゴ・デ・ヴェラ書簡**（底本はスペイン国立インディアス総合文書館所蔵）は、さらなる兵士の派遣と、兵士たちへの食料や他の必需品の供給などを国王に求めたものである。訳出箇所には日本船のフィリピンへの到来が記されているが、これは平戸の松浦鎮信が派遣したものだった。松浦氏とスペインとのかかわりは1584年にスペイン船が偶然に平戸へ到来したのをはじまりとする。このとき松浦鎮信は同船を歓待し、その帰還の際には総督宛の書簡と贈り物を託して、友好の意をあらわした(8)。訳出箇所に記されるセゴ

ヴィアへの日本船漂着はこれと同年のことで、サンティアゴ・デ・ヴェラはその日本船の乗組員を厚遇した。すると、それらのうちの幾人かは、平戸へ戻ったのち松浦鎮信らからの書簡を携えてふたたびフィリピンへやってきた。このときのことは⑬の訳出箇所に詳細に記されており、それによると鎮信の派遣した家臣は交易品として武器などを持参していたことや、サンティアゴ・デ・ヴェラは彼らとの取引に税を課さなかったことが知られる。また、その家臣の発言として、鎮信の目的が交易路の開拓とスペインへの軍事力供与の提案にあったとも記されている。ただし、翌1587年にルソン島で起きた原住民の反乱に日本人が関与していたことから、この提案と翌年の反乱の関連を指摘する説もある(9)。

これら本稿で訳出した史料を一覧すると、フィリピン諸島と日本とのかかわりは、スペインによる入植前から、すでにモーロ人との貿易を通して開始されており、それが入植後もつづいていたことがわかる。また、日本人は毎年のようにフィリピンを訪れる一方、モーロ人も中国だけでなく日本へも渡航していることから、その関係が相互の往来によって成り立っていたこともうかがえる。だが、⑥に記されるリマホン襲来の頃から日本海賊がフィリピンを襲う記録が見られるようになり、フィリピン側ではそれへの対処が必要とされるようになった。そして、そのような情勢のなかで松浦鎮信から派遣された船が到着したのだった。訳出史料の概要は以上の通りだが、これらは体験や伝聞情報を当時のスペイン人たちが記したものである。そのため、例えば琉球人を日本人と混同したりしているなどの可能性の存する点には注意する必要がある。

註

(1) BLAIR, Emma Helen&ROBERTSON, James Alexander (Eds.), *The Philippine Islands 1493-1898*, Arthur H. Clark Co., 1903-1909. ただし、1巻から5巻までの表題は *The Philippine Islands 1493-1803* となっていたが、刊行のさなかに方針が改められて1898年までを対象とすることになり、6巻以降では *The Philippine Islands 1493-1898* と変更された。よって本稿では後者に統一する。

(2) 清水有子『近世日本とルソン―「鎖国」形成史再考―』東京堂出版、2012年、12頁。

(3) 以下、状況についての補足は、主として *The Philippine Islands* の記述および神吉敬三訳・箭内健次訳注『モルガ　フィリピン諸島誌』(岩波書店、1966年) に拠った。

(4) 岡本良知『十六世紀日欧交通史の研究』復刻版、原書房、1974年、275頁。

(5) 前掲注3神吉訳・箭内訳注書、52頁。

(6) BOXER, C. R, *A Late Sixteenth Century Manila Ms*, Journal of the Royal Asiatic Society, 1950, p.43. 陳荊和『十六世紀之菲律賓華僑』新亜研究所東南亜研究室、1963年、30頁。菅谷成子「スペイン領フィリピンにおける「中国人」」

『東南アジア研究』43巻4号、2006年、376頁。
(7) ただし、章番号が振られているのは最初の10章だけで、残りの11章は小見出しのみで番号は振られていない。
(8) 外山幹夫『松浦氏と平戸貿易』国書刊行会、1987、134-136頁。
(9) 的場節子『ジパングと日本―日欧の遭遇』吉川弘文館、2007、188頁。

［附記］ 本稿は科学研究費補助金研究課題「西欧・中国・日本史料による16―17世紀東アジア海域史の総合的研究」（基盤研究（B）、中島楽章代表）の研究成果の一部である。

凡例

・以下の訳文は、*The Philippine Islands*の1巻～6巻所収の日本に関する記述を翻訳したものである。ただし、漠然とした位置情報の記述などについては採録しておらず、網羅的な訳出を意図したものではない。
・翻訳にあたって日本に関する記述を含む史料全てを翻訳することはせず、その前後の無関係の記述は省略した。その際、省略箇所には「(前略)」「(中略)」「(後略)」と記し、一段落以上にわたる場合は改行した。
・各史料冒頭の訳題は、訳者の意図によって付したのではなく、*The Philippine Islands*で付されている題名を翻訳したものである。ただし、末尾の括弧書は訳者の付加したもので、原典の収録巻数を示している。
・訳文内で訳者が付け加えた箇所は、直前部分の補足には丸括弧を、文意を補うため挿入したものには亀甲括弧を付した。ただし、原文にも丸括弧付きで記されている箇所があり、また別に脚注が付されている箇所もある。これらについては、訳者が付したものと区別するため、それぞれ「(※原文注：×××)」「(※原文脚注：×××)」というように記し、訳者の注記ではない点を明確にした。

①フェリペ2世宛ミゲル・ロペス・デ・レガスピ書簡（2巻収録）

神聖なるカトリック国王陛下へ
（中略）
我々の入植地よりもさらに北方ないしそこからそれほど遠くない北西の方には、ルソンやミンドロと呼ばれるいくつかの大きな島があり、中国人や日本人が毎年貿易に来ています。彼らは絹織物、毛織物、鐘、磁器、香料、鉄、錫、彩色の絹衣、そしてその他の細かな商品を持ってきて、見返りに金や蠟を持ち帰ります。これら二島の人はモーロ人で、中国人や日本人の持ってきたものを買うと、彼らはこの群島の島々で同じ品物を貿易します。我々がそちら〔の二島〕に行ったことはありませんが、それら（モーロ人）のうちの幾人かはこちらへ来たことがあります。というのも、広大な地域にあって〔それら二島へ派遣するために〕分割するには、少なす

ぎる兵力しか〔我々は〕有していないからです。
（中略）
1567年7月23日、当セブ島より。神聖なる陛下の御手足に接吻する、とても卑しく忠実なる僕。
ミゲル・ロペス・デ・レガスピ

②ルソンへの航海に関する報告（3巻収録）

（前略）その街（マニラ）には40人の結婚している中国人と20人の日本人が住んでいました。このうちの数人は戦闘から脱出する前に野営隊の長（マルティン・デ・ゴイチ）に会うため船に乗ってやって来ました。そのなかにはテアティノ帽を身につけた一人の日本人がおり、我々はそれによって彼がキリスト教徒だと考えました。我々がそうなのかと尋ねると、彼は肯定し、名はパブロだと言いました。彼は肖像に礼拝し、いくつかのロザリオを所望しました。しかし人々は、彼がモーロ人の砲撃手のなかにいたと述べました。（後略）

③フェリペ2世宛ミゲル・ロペス・デ・レガスピ書簡（3巻収録）

神聖なるカトリック国王陛下へ
（中略）
先の書簡により、私は当諸島（フィリピン諸島）における艪櫂のついた小型船の必要性、そしてそれが他の事柄のさらなる発見にいかに重要となるかを、陛下にお知らせして懇願しましたが、今日に至るまでおろそかにされており、これらの船をまったく所有しておりません。私は、我々〔のいる場所〕よりも北方および北西方の探査のため、二度にわたり兵をインディオ（現地人）のプラウ船に乗せて派遣しました。一度目には、小さいですが多くのモーロ人たちの住むいくつかの島々を発見しました。二度目には、彼ら（派遣した兵士たち）はルソンの沿岸を発見しました。ルソンは大きな島でモーロ人の集落がいくつかあります。後者（二度目に派遣された兵士たち）は大砲を有しており、火薬や他の弾薬と同様、彼ら自身の手で砲撃することができました。いくつかの街は彼らを平和のうちに受け入れましたが、他〔の街〕はそうではありませんでした。陛下の名の下に占領した地についてはこの書簡に書き添えます。これらの〔街にいる〕モーロ人たちは大変盛んに貿易をしています。なぜなら、彼らは中国本土の人々や日本人のもとへ行く目的のもとに航海するからです。
（中略）
当パナイ島より、1570年7月25日聖ヤコブの日に。神聖なるカトリック国王陛下の御手足に口づけする、最も卑しく忠実な僕。

④フィリピンと呼ばれる西方諸島に関する報告（3巻収録）

（前略）前述の島々（フィリピン諸島）のはるか北方には他の島々があり、もっともルソンに近いのは日本と呼ばれています。我々はその島を見たことはなく、私がそこについて述べる事柄は、かの地と貿易を続けているモーロ人を介して我々と関係があります。その島は銀鉱を有しており、中国からの絹やその他の必需品が銀によって購われ、すべての人々が、男女ともにきちんと服や靴を身につけていると言われています。そして中国にとても近いため、彼らはその国の文化を得ています。これらの人々はとてもよいカトラス（片刃の短剣）を製造しており、彼らはそれをレケス（1eques）と呼んでいます。それは1つないし2つの柄を有しており、とても鋭く、トルコのカトラスのように湾曲しています。刃のない側は、指の半分ほどの厚さですが、刃はとても鋭いです。テアティノ会の修道士がポルトガルからそこへ行ったと言われていますが、私は布教の結果を知りません。ポルトガル人は私に、彼の島の先住民は非常に好戦的に見受けられると言っています。その島の女性はとても貞淑で、しとやかで、男性をとても妬んでいます（※原文注：その地域ではとてもめずらしいことです）。彼ら（男性）は頭から髪を剃ったり引っぱったりしています。（後略）

⑤フェリペ2世宛フアン・パチェコ・マルドナード書簡（3巻収録）

神聖なるカトリック国王陛下へ

（中略）

豊かな国日本はルソンからおおよそ300リーグの距離にあって、そこからは多量の銀がもたらされます。毎年日本の船が商品を積んでそれらの島々（フィリピン諸島）に到来します。彼らの主な貿易は金と銀の交換で、2～2.5マルコ（※原文脚注：マルコは重量の単位で、様々なラテン諸国において金と銀を秤量するのに用いられる。スペインでは、1マルコは0.507641ポンドにあたる。）の銀を1マルコの金と交換します。（中略）そのようなわけで、この島（ルソン島）を植民し鎮撫して、そこにあるものを探し発見するべきです。なぜなら、その島はかくも広く大きいからです。このような理由から、その目的や未来のために必要なものを、陛下が喜んで供給することが望まれます。それは以下の通りです。第一に、（中略）第六に、前述の〔派遣を要請した〕500人の兵士が前述の島（ルソン島）に到着したら、その兵士らの持つ目的をすぐに達成する必要があります。それ（目的）はすなわち、前述のルソン島や、中国にもっとも近い地域である

日本や琉球やエスカウシュウ（Escauchu。九州か）島を従属させ、植民して探索することです。これは非常に重要なことなのです。
（中略）
フアン・パチェコ・マルドナード

⑥フィリピン諸島に関する報告（4巻収録）

神聖なるカトリック国王陛下へ
（中略）
21、彼ら（1575年のリマホンらのフィリピン襲撃に対し招集されたスペイン艦隊の船長たち）は言いました、その海賊（リマホンら）は、合計でおよそ三千人の男、そしてこれと同数の女を有しており、それは彼（リマホン）が強制的に中国や日本から連れてきた人々です、と。彼が有している大部分の人は、それらの国の現地人なのです。
（中略）
70、何人かのインディオ（現地人）、日本人そして中国人が当地で私（フランシスコ・デ・サンデ）に、ポルトガル人は武器、特に我々が使っているような火縄銃を中国へ持って行っていると語りました。そして中国人は私にポルトガルのブロードソードを売りました。ポルトガル人は彼らに大型砲の使い方、馬の操り方、その他ひとしく我々に有害なことを教えた可能性があります。彼らは商人なので、そのようにしたのは驚くべきことではありません。この〔中国への〕遠征を早めすぐにおこなうのがよいと、国王陛下はお考えになりませんでしょうか。実際、これは神と国王陛下への奉仕のために起こり得るもっとも重要なことです。我々は、そこには数百万の人がおり、〔征服した場合、〕彼らから国王への貢税は300万かそれ以上であることを聞いております。
（中略）
74、これらの島々（フィリピン諸島）には十分に木があり、ガレー船による大艦隊を構成するのに十分な兵がおります。また、すべての島々にはたくさんの海賊が住んでおり、我々は彼らからこの〔中国への〕遠征のための援助を得ることができます。また、中国の仇敵である日本からも同様に援助を得られます。すべての人々は喜んでそれ（遠征）に加わるでしょう。何人かの現地の海賊たちも我々に加わって、その国に我々を案内するでしょう。
（中略）
1576年6月7日、フィリピンのルソン島マニラにて。神聖なるカトリック国王陛下へ、陛下の御手に口づけする忠実なる家臣にして僕より。
ドクトル・フランシスコ・デ・サンデ

⑦フェリペ2世宛ゴンサロ・ロンキーリョ・デ・ペニャロサ書簡（5巻収録）

神聖なるカトリック国王陛下へ

（中略）

彼ら（フランシスコ会修道士たち）は私（ゴンサロ・ロンキーリョ・デ・ペニャロサ）の許可なく秘密裏に用意を調えていたフラガッタ船に乗って出帆し、マカオに行きました。同所はポルトガル人の居住する中国の街です。ポルトガルに属するインドからの船がそこに停泊し貿易します。日本へ行く船も同様です。

（中略）

〔15〕80年および〔15〕81年に、これらの島々（フィリピン諸島）から約400リーグに位置する日本から海賊船がやってきました。彼らは原住民にいくらか危害を加えました。〔それに加えて〕今年、10隻の船がこれらの島々に来ようとしているとのしらせを受け取ったため、私はそれらがたびたび到来している場所へ艦隊を差し向けました。この艦隊は6隻の船舶からなっており、そのなかの一隻の船と一隻のガレー船は十分に銃器を備えています。のちほどその結果についての情報をお送りするつもりです。日本人は世界のこの地域において、もっとも好戦的な人々です。彼らは大砲や多くの火縄銃と槍を有しています。彼らは体に鉄製の防具を用いていますが、自身の損傷に対するその特性を誇示したポルトガル人の巧妙さのために、彼らはそれを所持しているのです。

（中略）

マニラより、1582年6月16日。神聖なるカトリック国王陛下へ、陛下の御手足に口づけするもっとも卑しい僕より。

ドン・ゴンサロ・ロンキーリョ・デ・ペニャロサ

⑧ヌエバ・エスパーニャ副王宛フアン・バプティスタ・ロマン書簡（5巻収録）

いとも名高き閣下へ

新たな情報を記した総督（ゴンサロ・ロンキーリョ・デ・ペニャロサ）の今日書いている手紙が、このアカビテ（Acabite。ルソン島内の、マニラの南方に位置するカヴィテCaviteのこと）の当港に送られてきたこの船に載せるのに間に合うよう到着するかどうか、私にはわかりません。したがって、私は何が起こっているのかを閣下にお知らせします。昨日、聖ヨハネの日（6月24日）の午後、隊長フアン・パブロ・デ・カリオン（※原文注：*Cartas de Indias*, p.734にあるこの船長を概略した記述には、彼はヌエバ・セゴビア市をつくり、おそらくその占領の時から死ぬまでフィリ

ピン諸島に滞在した、とある。また、ここで言及されている日本人海賊はTay Zufuという、とある。）とともにカガヤン川に拠点を構えている日本人と戦った、6人の兵士が到着しました。彼らは次のように言いました。フアン・パブロが、旗艦サント・ジュセペ号と5隻の帆船で構成される彼の船団とともに、カガヤン（台湾や日本に最も近いルソン島北東部）から35日ほどの距離にある、イロコス（ルソン島の北西部、カガヤンの西側）にあるビガン港から出航しました。出航した時、彼（フアン・パブロ）は中国人海賊に遭遇しましたが、〔その海賊は〕すぐに降伏ました。彼は17人の兵士を船に乗せて航路を進み続けました。ある美しい朝の夜明けに、カガヤンに近いボルガドール岬を回ると同時に、彼ら（6人の兵士たち）は自分たちが日本の船の近くにおり、フアン・パブロが彼自身の乗る旗艦とともに〔その日本の船と〕交戦していることに気付きました。砲撃によって、彼はそれら（日本の船）のメイン・マストを撃ち、数人を殺しました。日本人は鉄鉤を出して、槍と胸当てで武装した200人が旗艦（サント・ジュセペ号）に乗り移りました。我々に発砲する60人の火縄銃兵も〔旗艦に乗り移らず〕残っていました。最終的に、敵はメイン・マストのところまで旗艦を制圧しました。我が国の人々もまた強い必要から抵抗し、日本人を彼らの船へ後退させました。彼らは鉄鉤を降ろし、まだ残っていた前檣帆を取り付けました。この時サント・ジュセペ号は彼ら（日本人）に立ち向かい、船の大砲と兵力によって日本人を圧倒しました。日本人は18人が残されるまで勇敢に戦いました。〔その18人は〕降伏し、疲れきっていました。旗艦にいた何人かは殺され、なかでも船長のペロ・ルカスは、よき兵士として勇敢に戦いました。そして、隊長フアン・パブロは、カガヤン川を上り、最初に砦と11隻の日本船を見つけました。河口が幅1リーグだったため、彼は岸に沿って通過しました。その船サント・ジュセペ号は川に入っており、不幸にも、小さなフリーゲート艦にいた我々の兵士の幾人かは、「帰りましょう、マニラに帰りましょう。1000人の日本人が大量の大砲とともに川におりますが、我々は少数ですから、全艦隊を帰還させましょう」と言って、隊長を呼び止めとめるということが起きました。すると、艦長のルイス・デ・カジェホは彼の〔船の〕針路を海の方へ向けました。そして、フアン・パブロは一部の大砲を発射しましたが、彼は〔カガヤン川へ〕入りませんでしたし、入ることができませんでした。そして行ったり来たりと進路を変え続けました。その朝、彼はある入り江に碇をおろしました。そこでは、彼が所持していた4本の綱のうち3本を破壊するほどの暴風に襲われ、1本〔の綱〕は碇をあげるのに使用されました。彼は、彼ら（スペイン艦隊員）がとても必要としていたいくばくかの水が小島にあるかどうかを確かめるために、小さな船に乗ったこれら6人の兵士

を派遣しました。その男たちは一滴の水を見つけることもなく道に迷ってしまいました。そして船から出発した場所へ帰還したとき、彼らはそれ（船）を見つけることができませんでした。彼らは、フアン・パブロとともにガレー船にいた現地人のうちの幾人かに会い、彼らからフアン・パブロは川を2リーグ上った入り江で防備を固めていることと、彼とともにガレー船が行ったが、それは日本人との戦闘によってあちこちが水漏れしはじめているものだということを聞きました。その現地人乗組員はガレー船で失われたものの補給をしなかったという理由で解雇されていました。それらの人々のほとんどがサント・ジュセペ号に乗っていました。彼らは、日本人は18艘のスキフ（一人乗りの小型平底船）のようなシャンパン（舢板）（※原文脚注：中国船。Retana（Zúñiga's *Estadismo*, ii, p. 513）は「スペインのパタシェ（哨戒艇などに用いられた小型船）と同じくらいの大きさ。しかし中国のジャンク船よりは小さい。フィリピン諸島において貿易をおこなう人々が使用した」と述べる。この語は、現在は12ないし15フィートの長さで、一家がしばしば家をなかに作る、珠江の舟に対して用いられる。また、コロンビアの河川で用いられた積載量70～80トンの船に対しても用いられる。）に乗って攻撃してきていたと言いました。水夫もあわせて60人の兵士しかおらず、そして1000人もの勇敢かつ熟練した部類の敵がいたにもかかわらず、彼らはよく防御していました。その6人の兵士たちはこの消息とともに到来し、途中でフアン・パブロへ補給する米を持ってここから出帆した、サングレイの船から逃亡してきた船員と遭遇しました。彼は、サングレイは深夜に反乱を起こし、護衛のため見張り無しでそれに同行していた10人の兵士を殺した、と言いました。この〔サングレイの船から逃れてきた〕人は、船から彼に投げつけられた槍を用いて泳いで逃げてきたのです。

また、私はまさにこの船に乗っていた者数人を拘留しています。これらの島々には軍隊がおらず、また100人の兵士が、大荒れの天気であっても、すぐに増援としていかなければならないからです。もし総督が私に許可を与えてくれるならば、私はそれらのうちのひとりになる（増援として赴く）つもりです。

実際にこちらに残存しているこれらの敵は、好戦的な人々です。そしてもし閣下がこの船によって1000人の兵士を供給し増強してくれなければ、これらの島々はほとんど価値のないものとなるでしょう。どうか、閣下は国王陛下の軍隊にもっとも必要なものを、大いなる用心をもって供給してください。なぜなら、閣下が我々に与えるよう命じること以外に、我々は補給源を持たないからです。

総督はその船に援助を送ることを欲しており、それはとても重要なこと

でした。しかし、これらの出来事のあと、彼はそうすることができなくなるでしょう。なぜなら、この都市には武装可能な70人の男〔さえも〕が残されていないからです。閣下の僕たちが願う通り、いとも名高き方である閣下を神がお護りくださいますように。カヴィテより、1582年6月25日。
いとも名高き方である閣下へ、あなたの御手に口づけする僕より。
フアン・バプティスタ・ロマン

⑨フェリペ2世宛ゴンサロ・ロンキーリョ・デ・ペニャロサ書簡(5巻収録)
神聖なるカトリック国王陛下へ
これらの島々（フィリピン諸島）を今年の6月の終わりに出発することになっているこの船によって、私は当地域（フィリピン）の情勢についての詳細な報告を行います。それが出帆しようとしている時、情報が艦隊からもたらされました。その艦隊は、私が他の事柄と一緒に〔以前の書簡に〕書き記しましたように、カガヤンにおける入植を遂げるため私が派遣したものです。〔情報は〕日本の海賊の処罰と抵抗に関するもので、その（海賊の）到来を我々は今年知りました。前述のように私が派遣したその艦隊は、カガヤンの近くで2隻の敵船と遭遇しましたが、そのうち1隻は日本のもので、もう1隻はサングレイのものでした。戦闘が起き、これらの船は激闘ののち降伏しました。200人の日本人が死に、そのなかには船団の指揮官およびその息子がいたのに引き換え、我々は3人の兵士しか失いませんでした。
この艦隊を預かる提督代理として私が派遣したフアン・パブロ・デ・カリオンは航海を続けてカガヤン川に入り、そこで彼は入植することになりました。その川の入り口で、彼はすでに降伏していた船団に属する6隻以上の日本船団を見つけました。そこにはかなりの数の人もおり、砦もありました。この遠征で彼が乗っていた旗艦が暴風雨に流され、人員不足だったため、彼はそれらの砦を奪取せず、川に入ることだけを試みました。彼は6リーグほど上り、砦を築くことができ、敵に対する攻撃と防御を指揮できる場所に、腰を落ち着けました。この情報は昨日到来し、大至急私は増援部隊、船、弾薬、そして必要な食料品を送っているところです。先に書いたように、その〔地での〕事業がとても重要であるため、モルッカを援助するには少なすぎる戦力しか私には残されていないことから、私はこの目的のために兵士を雇用することが非常に必要だと考えました。しかし、もし彼らがその場所から救援要請を送ってくるなら、私は総力を挙げて部隊を送ります。というのも、私が要請してきたにもかかわらず、ヌエバ・エスパーニャから全く増援が送られてこないため、私は人員やその他の物資の多大な欠乏に苦しんでいるからです。この土地は、健康に悪い天候だ

けでなく、絶えず勃発する多くの突発事件のために、持続的かつ差し迫った増援の必要性に悩まされており、そんなとき私は救援を送らなければなりません。今やこれらの出来事は、これまでにそうであったような、戯言などではありません。というのも、中国人や日本人は、現地人とは違い、ベルベリア（※原文注：バーバリ）（エジプト西部から大西洋岸にわたる、地中海岸のアフリカ北部の地域）の居住民の多くと同様に、そしてそれにも増して勇敢な人々だからです。私は陛下に、これに対し細心の注意を払い、すべての船に可能な限り多くの兵を乗せて派遣されることを懇願します。それこそが、この駐屯地を存続させるために欠くことのできない最重要のことだからです。

（中略）

マニラにて、〔15〕82年7月1日。

（※原文注：「我が君、神聖なるカトリック国王陛下、ドン・フェリペ王へ、王立インディア評議会経由。フィリピン総督」との書き入れがある）

⑩メキシコ大司教宛サンティアゴ・デ・ヴェラ書簡（6巻収録）

いとも名高き閣下へ

（中略）

閣下の命によって、私（サンティアゴ・デ・ヴェラ）は、当地（フィリピン）のサングレイが私に多量の水銀をよこすように、彼らと協定を結ぼうとしました。しかし、ここしばらくの間、彼らはそれを日本人のところへ運んでいます。彼の国（日本）には多くの銀鉱山があり、彼らはそれを高値で受け取っています。このため水銀は値上がりしており、彼らはとても抜け目ない商人なのでこの種の取引が望まれているとは信じないでしょう。閣下が定めた価格で彼らがそれを売り渡すかどうか分かるまで、私は徐々にそれ（協定を結ぶこと）を進めます。私は名高き閣下にそれに関する結果を報告するでしょう。

（中略）

私が持ってきた大砲はモーラ号およびサン・マルティン号に戻しました。そしてサンタ・アナ号はとても重要なので、私は、火薬と砲弾に加え、銅製のすばらしい大砲3門を船に乗せるよう命じました。これを与えることで我々が大砲を欠いてはなりませんので、名高き閣下が大砲を同船サンタ・アナ号に返却してくれるよう、切に望みます。というのも、日本人が敵対行為の兆候を見せ始めており、彼らないし他の海賊たちが我々の戦力を軽んじるのは望ましくないからです。

（中略）

マニラにて、1585年6月20日。名高き閣下へ、あなたの両手に口づけする僕にして依頼人。

サンティアゴ・デ・ヴェラ博士

⑪フィリピン諸島の市民による評議会への嘆願書（6巻収録）

マニラの審議会によって評議会へ提示された、それぞれに関して最も望ましい改善をはじめるための、様々な論点の覚書

（中略）

第4章　この政府（フィリピン総督府）および王国（スペイン王国）の形成および拡大に起因する他の問題について

（中略）

6、多くの牛や馬が中国や日本からもたらされること、および水牛が飼い慣らされていること。第6に、陛下は、中国や日本からもたらされる多くの馬や牛を所有するための尽力がなされるよう、そして当地の農夫やインディオ（現地人）の長および集落が水牛を飼い慣らし飼育するようにという指示がなされるよう、厳然とした命令を出すべきです。これらの方法で、彼らは、彼らの他の作業や食料のために、土地を耕すのに必要な動物を飼うことができます。

（中略）

第7章　当地方で必要とされる砦および要塞について

（中略）

3、反乱から懸念される5つの危険とその対処。第3に、反乱ないし侵略から懸念される5つの危険があります。第一は原住民によるもので、彼らは大勢いて、ひどく虐げられており、しかしまばらに定住しております。第二は中国人によるもので、4000人ないし5000人が当地に居住し、出入しております。第三は日本人によるもので、彼らはほとんど毎年来襲してきており、そして、ルソンに入植する意図を持っていると言われています。（中略）日本人や中国人の略奪者に対し防御するために、イロコスないしカガヤンに要塞が必要です。

4、この諸島（フィリピン）の安全を確保するためにあるべき船舶について。第4に、これらの要塞に加えて、沿岸部を安全にし、そして日本人の侵略を撃退するための、何隻かの沿岸を航行するガレー船やフラガッタ船があるべきです。彼らは（※原文注：毎年、主にカガヤンとイロコスに襲来しており―王立歴史学士院写本〔により補う〕）略奪して多くの現地人を殺し、我々に食料や商品をもたらす中国人の船を拿捕します。そのため多くが失われ、交易や豊かさが妨げられています。彼らは、マニラから自国に戻ろうとする中国人が通常の経路をとらないことの原因にもなってい

ます。そして、今でもおこなっているように、彼らは我々のインディオ（現地人）に海でも陸でも危害を加えます。
（中略）

サンティアゴ・デ・ヴェラ博士
フィリピン司教
メルショール・ダヴァロス学士
ペドロ・デ・ロハス学士
アヤラ学士
マニラ助祭長
アントニオ・セデーニョ学院長
アロンソ・サンチェス
（以下、署名略）

⑫フェリペ2世宛マニラ司法行政院書簡（6巻収録）

神聖なるカトリック陛下

去る〔19〕85年、我々は陛下に当島（ルソン島）の状況や陛下の軍に関するいくつかの他の問題を報告しました。それにはこの書簡の写しが含まれております。もしそれをご覧いただけていないようでしたら、我々は陛下にそのようにして（ご覧になって）、それらの問題について対応してくださるよう懇願いたします
（中略）

第二節　戦争によって被った費用

陛下の命により、総督府や財務事務局〔の建物〕は、5000ペソ余りで売り払われました。そして、この金額はヌエバ・エスパーニャ当局やセビージャの通商院とは別口で送金されるはずでしたが、これらの島々（フィリピン諸島）を略奪するのを常とする日本の海賊に対し軍事行動をおこなう艦隊や、〔ヌエバ・エスパーニャとフィリピンのあいだを〕航海するために造られている船に〔その売却で得た金を〕費やすことは絶対に必要です。というのも、ヌエバ・エスパーニャへの陛下の艦隊の派遣や他の問題のため、〔船の〕往来を止めるべきでないからです。王室関係者が送っている計算書によってわかるように、そういった困窮を救うべき国庫にはこれ以上資金がないため、これは避けられないことです。
（中略）

マニラより、1586年6月26日。神聖なるカトリック陛下へ、あなたの御足に口づけする僕。

サンティアゴ・デ・ヴェラ博士
メルショール・デ・アヴァロ学士
ペドロ・デ・ロハス学士
ドン・アントニオ・デ・リベラ・マルドナード学士

⑬フェリペ2世宛サンティアゴ・デ・ヴェラ書簡（6巻収録）

陛下

昨年、〔15〕86年、私は陛下にこれらの諸島（フィリピン諸島）の状況と、それら（フィリピン諸島）の改善と保全のためのいくらかの物品の必要性をお知らせしました。これらの諸島が非常に遠く離れていることや、書簡が陛下の御手元に届くまでに遭遇する危険のために、昨年の書簡の写しをこれ（この手紙）に同封します。同じ理由から、私は陛下がその書簡に返答してくださることを懇願し、陛下の軍隊にもっとも適切なものを与えてくださることを求めます。

（中略）

以前の書簡で、私は国王陛下に、当諸島（フィリピン諸島）のカガヤン地方にあるセゴヴィア市に小麦粉と馬を積んだ日本船が到着したことをお伝えしました（※原文注：彼ら（日本人）はそれらをこの都市へ持ってきました）。彼らは海岸沿いにそこまでやってきました。そして乗組員の何人か、および馬の何頭かは、何とか死亡を免れました。私はこれを知ってすぐに、彼らのために船を派遣し、彼らが到着してからは厚遇を与えました。このため、当島および彼らに与えられた厚遇に対し、大いなる賞賛を彼らの国において公表したほどに、彼らは感謝しました。彼らのうちの何人かは、キリスト教徒も異教徒もあわせて40人ほどの他の者たちとともに、平戸の王（松浦鎮信）および彼の兄弟ドン・ガスパルからの書簡を持って戻ってきました。書簡の原本はそこに同封されていました。彼らはいくらかの品物と武器を商売のために持ってきました。彼らが言うことには、その王国で戦争が繰り広げられており、63の王国が従属しているミヤコでは、そこに住むイエズス会の神父たちが日本中を自由に伝道できるように、そして望む者すべてがキリスト教徒となるのを許可するために、彼らへ通行証明書が与えられた、とのことです。国王陛下は彼の書簡の写しによってご覧になるかもしれませんが、これは神父の一人によってそこに住むイエズス会の構成員たちが保証されるものです。このとてもよいしらせを聞いて、こちらの島々（フィリピン諸島）では非常に喜びました。神がこれをお導きになり、この新世界はあなたの指示と命令によって救われることをお許しになりました。〔日本にある〕多くの王国、無数の人々、そしてそれらの領地の富は信じられないくらいのものです。日本人は活動的な人種で、我々の武器の使用に熟達しております。他のすべての民族はその精神を欠いており、臆病かつ卑劣で浅ましいです。

先に述べた通り、今年マカオから2隻の船が来て、ポルトガル人が大量の生糸、タフタ織、ダマスクス織やその他の品物を持ってきました。私が手厚く遇して友好的に接したところ、彼らは深く感謝し、再び来ることを

望みました。なぜなら、彼らは〔そのときの交易で〕多大な利益を得たし、航海は晴天ならば2週間で終えることができるからです。私は、彼らがもたらしたものや日本人の商品から徴収される税金は全く認めませんでした。これらに税を課すのが時期尚早だったからだけではなく、我々との通商貿易への欲求を喚起するためです。また、国王陛下が我々に、彼らと友好関係を構築し意思を疎通させるよう命じたからでもあります。ですが、主たる理由は、前記の徴収について国王陛下から指示がなかったことです。そのうえ、この土地は本当に新しく、新芽のように扱われなければなりません。それ（貿易）は日々増加していくでしょうから、特にポルトガル人によって彼らが我々に抱いている敵意を喪失させるために、そして他の外国人が我々との取引とキリスト教〔の受容〕を望むようにするために、私は苦しめるのではなく養生することを試みるのが望ましいと考えました。私は国王陛下に、今後どのようにすべきかについて命令を下されますよう嘆願します。

（中略）

私はいくつかの事柄について、日本からきた船長と議論しました。彼は、立派で知性のある人物でかの国の主立った者たちのひとりである、平戸王の家臣です。船長は私に言いました、彼のこちらへの旅は、我々と面識を持ち、彼の国からこれらの島々（フィリピン諸島）への道を拓くことを目的としていましたが、彼の最大の目標は、陛下（スペイン国王フェリペ2世）の軍隊に平戸王と彼の王国の人々を提供することにあります、と。また言いました、陛下もしくはこれらの島々の総督が、前述の平戸王、および彼の友人でドン・アウグスチン（小西行長）という名のもうひとりのキリスト教徒の王へ、あなたの軍隊のための軍勢の必要を知らせる時はいつでも、彼らは要求されたのと同じ数だけ人や兵士を送るでしょう、これらすべては、ただ陛下に仕えて名誉を得ることのみを望むがゆえに、見返りを何ら求めず、〔敵対している国なら〕ブルネイであろうと、シアン（Sian、シャムSiamのことか）だろうと、モルッカだろうと、中国だろうと、完全に武装してわずかな費用で到来するでしょう、この男はその配下に500人のすぐれた兵士を有しており、彼はその長として喜んでこちらにくるでしょう、と。これらは彼の正式な発言です。良識的な人かつ戦争経験豊富な者として、彼は私にいくつかの助言や、それらの地方から6000人を容易に連れてくる計画、そしてそのなかで採り得る方法を伝えました。それらは少なからず適切性を有しているように見受けられました。私は陛下の名のもとに心から彼に感謝し、彼の申し出に対しては、陛下はいま中国ないし他の王国の征服を考えてはいないこと、陛下の目的は先住民を改宗させること、すなわちすべての人が救われるため、彼らに神聖な福音を伝道

し、われらが主の知識を彼らにもたらすことにあったし、いまもそうであること、そしてこのために、陛下は福音の伝道のための防衛と守備に莫大な金額を費やし、年に1度多くの兵士・武器・弾薬を送っていることを述べました。私は彼に伝えました、武力によってこれを遂行するのが望ましいときに、そしてもし何らかの必要が生じたならば、彼らがそのよき願望（援軍を派遣すること）を達成できるように、私はそれらの王国に知らせるつもりです、その結果、それによって陛下は奉仕をうけることになるでしょう、と。私はまた言いました、〔平戸の王は〕非常に有力な国王なので、他の親しい王たちに関するあなた方の慣行と同様に、陛下は彼らに報いるでしょう、と。そして彼に、陛下を受け入れ奉仕することにおいてそれらの島々の領主に生じるであろう、大きな利益のことを言いました。彼はこれに十分満足し、私はそれにもまして満足しました。その民族を見ると、陛下に奉仕したいというすばらしい願望に満ちていることは、陛下の軍隊にとって本当に重要です。陛下が中国ないしこの新世界の他の一部への遠征を命じるのに、陛下は彼らを活用することができるのですから。これ（日本人）はとても好戦的な民族で、すべての現地人のあいだで恐れられております。特に中国人は、彼らが受けてきた多くの被害と最近体験した〔日本人の〕勇気と胆力のため、まさに名前だけで身を震わせます。私はこの協議を秘密の状態にしており、そしてその状態にしておくよう命じました。なぜなら、中国人は疑い深く臆病な民族なので、彼らがこのことを耳にしてはいけないからです。私はこの日本人たちを大切に扱い、特別に手厚い待遇でもてなしました。私は陛下の名のもと平戸の王に対し、惜しみない言葉で彼の申し出に感謝する書簡を書いているところです。この民族の愛情とキリスト教を信じる熱意は並外れており、我々は戸惑っております。

（中略）

マニラにて、1587年6月26日。

サンティアゴ・デ・ヴェラ博士